

1. 神話の時間性と無意識

では、このような神話のえがく「構造」である『神話論理』の中には、「隠喩」「換喩」、「反転」「縮約や媒介」などのいわばアナロジーをもって変換される多重の二項対立のコード（符号）が内包されており、このコード（符号）は神話の場面毎、細部毎に変換されているのだが、その行方をコントロールする事柄、それに関連した事柄は見出しうるのだろうか？

①象徴機能²

レヴィ＝ストロースは神話論理の探求の真髓について「神話が人間の中で、人間に知られることなく、いかに思考するかである」といっているが、神話が思考するとは、神話論理の展開過程を指していると考えられる。

フロイドは『夢判断』の中で、「夢の顕在的内容と潜在的な夢思想とを区別しながらも、夢の本質は、その潜在的内容にあるのではなく、変形を行う夢の作業にある」として、「無意識の本質を変換の構造的規則に求めている³」とされる。この言葉に近い内容だが、レヴィ＝ストロースは無意識について、「集積された記憶と心象の貯蔵庫」や「各自をかけがえの無い存在たらしめるいわく言い難い個人的諸特性の隠れ家⁴」などではなく、一つの機能、変換を行う夢の作用——象徴機能——を指し示すとしている。

この表現は、音韻論による言語の記号としての性質に係わる、レヴィストロースの思想（方法論を含む）からの論理的展開であろう。神話とは、人間が自然状態から文化状態へと移行する過程で、人間の生命活動を包む自然の中に、ある差異を見出してなお生き続ける人々の感興、文化状態に移行したが故に問題となる事柄（火、調理、纏う一衣服、装身具等の起源等）を語るものだが、基準神話を設けてこれを基準として、離れた他部族の神話と比較対照してみると、その展開において互いにある種のアナロジーによって繋がる、変換関係が見出される。その変換関係の発生は、その時々における自由な、恣意的な、人における象徴機能によるものであり、浅田においては「象徴秩序⁵」との解釈である。

人間が自然状態から文化状態に移行したからこそ問いかける、人間の生存条件を構成する諸問題、それらを自然の動物種や植物種の営みとの類推関係、アナロジー関係をもって

1 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P228 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月
2 同上 P233 6行
3 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P234 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月
4 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P233 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月
5 浅田彰 『構造と力』 P37 勁草書房 1983年12月

取り込んで記し、時々象徴機能による、隠喩、換喩、反転といった変換のもとで『神話』が語られている。

レヴィ＝ストロースは、神話論理をつくりあげるもの、その語る方向性を決めるものは、現実の出来事、事物に拘束されることのない、いわば無意識と言うようなものとする。しかしそれはユングでも、フロイドでも無い、「無意識のうちにはたらく、差異のみからなる体系⁶」であり、「問題となっているのはコード（符号）であり、それはある種の事柄だけを特別に表現しているのではなく、概念的道具を通じてある現象の次元を異なる次元へと変換する機能を持っている。⁷」と説明されているが、それが「象徴機能」であろうと思われる。

渡辺はこのような思考「野生の思考」について「対象から浮動して融通無碍なシステムを構成する自由度の表現⁸」に他ならないとしている。

人間の象徴機能は、いわば多方位に向けて展開するのであろうから、各地、各民族の風土と自然的環境の多様性において、人の象徴機能、その構成する文化内容が展開しており、神話の論理はその展開過程が、薔薇窓様に多方位へと展開をしている事、その事を神話論理の分析が示していると思われる。

人間が文化状態に移行したが故に生じた従前との差異、それ故の感興、そしてその解題は「天体、昼夜の交換、季節の循環、社会組織、近隣部族との政治的關係」などと森羅万象を巡りつつ、反転、転喩、換喩などと変換を重ねつつ神話が展開していく。

レヴィ＝ストロースの神話論理の分析は、その語られる状況、語る側の心性、アメリカ先住民の内側、象徴機能の発現する時空に彷徨いこみ、探り当てると言った手法であり、アメリカ先住民との時空を超えた邂逅、その反芻の内に進められたとでも言えようか。

② 時間の流れ方

象徴機能をうけて変換される神話の展開、その時間性は「可逆的かつ不可逆的、共時的かつ通時的でもある⁹」という二重性を持つとされるが、共時態の中に通時態が「入れ子」のように埋まりこんでいる構造ともいえるべき、時間性を示していると考えられよう。

神話は、自然状態から文化状態へ移行する人間にとっての、自然に刻みこまれた差異の意味の反芻であり、自然的生物の環境として連続していた自然に、今や刻まれた従前との

6 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P071 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

7 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P56 講談社選書 2009年6月

8 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』P2 弘文堂 2004年12月

9 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P163 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

違い、差異、亀裂、不連続性を語りつつ、その不連続となった事態の調整のための論理、胸に落とそうとする論理と思われる。

しかしこの自然から文化への移行の調整とは、差異をめぐる亀裂の調停であり、元に戻る事はできないのであり、消す事のできない変化、刻まれた差異のあちらとこちら双方を対峙させる二項対立を、さまざまにアナロジーを重ね、媒介項、中間項をつくり、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）を関与させて、差異、亀裂の縮約¹⁰を図っていると言えよう。

しかしながらその時、初期の二項対立軸、生のもの／火にかけたもの、裸／非裸（装身具、衣服をつける）、天の水／地上の水といった差異故の不連続は、様々に隠喩、換喩、反転されつつ消えることのない要素として「構造」に関与し続ける。

このような時間の流れは、弁証法的に正反合と止揚されて次の次元へと至るといった、その時代時代を牽引する要素は互いに吸収されあい、止揚されて新たな段階へ、異なる次元へと止揚されるという時間性とは異なり、二項対立が多重層的に重なりあい、解消され得ない二つの響き合いを繰り返しているといえよう。初期の対立は吸収されることなく、複合的な対立軸を重ね続けてゆくのであり、新たな次元へと吸収されて発展する歴史時間、弁証法的な正反合のイメージを否定する構造である。

このような時間概念は、野蛮から文明へという発展の道筋があって、すべての文化はこの道筋の途上にあるとする、西欧近代的な常識が、覆されてゆく展開であろう。西欧近代のえがく歴史発展の図式、ヨーロッパ社会は先進社会であり、アフリカ、アメリカ大陸、アジアの人々の文化、歴史の目指すべき方向がヨーロッパ社会であるとする論理を、その根底において否定する図式として浮かび上がるのであろう。

「野生の思考」という多方位へと向かう人々の象徴機能の展開である「神話」の読み解き、その経過を語る中から、レヴィ＝ストロースは近代科学的な思考は、ある限定された範囲に限極した上で可能ならしめる論理では無かったのか、それにも拘らず、それこそを十全な正義として進めていこうとする狭隘さ、虚構性を抱えていると語っているかのようである。そしてそれは 19 世紀的な近代的思考様式の相対化を促しているのであろう。

自然の中にあって、象徴作用と言うゼロの磁場による転換を繰り返す「野生の思考」の論理性は、対象を科学的に把握できる存在として、歴史発展の方向を理性的合理的に知る事ができるという自我、近代的自我における思考の狭隘さを浮き彫りにしている。

——自然と文化の関係へ——

10 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P228 ちくま新書 265 筑摩書房 2013 年 9 月